

学会創立十周年にあたって

小澤俊夫

月日の流れは早く、わが日本口承文藝學會は、昭和六十二（一九八七）年で、創立十周年を迎える。学会としては、日本でもっとも若い学会に属するであろうが、口承文芸の分野で、全国学会が創立されて十年を経たことは、喜びにたえない。

口承文芸研究の分野で、全国学会をもちたいということは、関係する研究者の永年の夢であった。柳田国男、折口信夫、南方熊楠らの大先達によって、日本の口承文芸研究の重要な礎石は積み上げられてきたが、未だその機は熟さなかった。第二次大戦後、各地に、それぞれの研究者たちによって研究会が設立され、活発な活動が開始され、成果を挙げてきたが、それでも、さまざまな理由から、全国学会設立には至らなかった。

それが、昭和五十二（一九七七）年に至って、ついに、関敬吾、直江広治、臼田甚五郎、大林太良の諸氏の団結と決断によって、全国学会としての日本口承文藝學會が成立したのであった。これは、日本の口承文芸研究史にとって、歴史的な出来事であったと思う。

それは、口承文芸という新しい学問分野の研究が、口承文芸学として認知されていくために、不可欠のプロセスなのである。

「私の専攻は口承文芸学です」と胸をはって言える日がこなければならぬ。口承文芸学の教員・研究員として、教育機関や研究機関にポストを獲得できる日がこなければならぬ。それは勢力の拡張などというケチな問題ではなく、日本の文化の重要な一面を、世間に認識させることなのである。

各種の研究グループが各地に誕生し、活発に活動することは、研究の充実そのものであり、大いに喜ぶべきことであるが、以上述べた意味で、全国学会としての日本口承文藝學會の創立十年の歴史は、大きな一歩であると、私は思っている。

第五代会長として、この十年をふり返ってみると、関、臼田、本田、臼田の四代の会長の功績によって、現在まで発展してきたことに感謝したい。

口承文芸学は、学問的領域としては、多くの文化現象を包含するので、相互の交流が重要である。その意味で、毎年の大会、研究例会は、重要な役割りを果たしてきたと思う。特に六十一年度の大会は、会場が遠野であったために、例年になく多くの発表があり、参

加者があつた。若い研究者たちの意欲的な研究の発表が目立った。喜ばしいことである。

学会での発表は、講演会ではないのだから、大胆な試みが発表されていいと思う。試みは、研究者仲間に問い、批判されることよつて磨かれていくのだから、批判をおそれず、出しあう雰囲気をもりたい。特に、日本における口承文芸研究は、きわめて若い学問なのだから、試みなければならぬ問題は、あちこちにひそんでいるのである。若い研究者が試みるべきことはたくさんある。そして学会は、その試みを、大らかな眼で見てゆきたいと思う。もちろん、学問的にはきびしく批判しあいながら。

研究例会は、六十一年度から複数回おこなうことが決定された。当面は二回開催であるが、なるべく回数を多くし、自由な研究発表の場をふやしてゆきたい。そして、会場も東京に限らず、各地にひろげてゆきたいと考えている。近ければ参加できるのに、と思つておられる会員が各地にいるからである。開催地になるといつても、大会のばあいのように煩雑な準備が必要なのではないので、会員各位におかれては、自分のところで開催したい、と申し出ていただきたい。事務局と協力して、各地で研究例会が開催されれば、学会活動としてまことに喜ばしいことであると思う。

大会、研究例会と並んで、学会誌の発行も重要な活動である。歴代の編集委員会の努力によつて、学会誌「口承文芸研究」は次第に充実してきた。しかし、もつと多くの論文を掲載できるようにならなければならないと考えている。だが一方では、学会誌はその性質上、売上げによる大きな収入を期待できるものではない。そうなる

と、会員数をふやして、会費の増収をはからなければならないことになる。会員の増加のためには、上述したように、研究例会を、各地で、なるべく多く開くことが必要になるわけである。

口承文芸学の大事典も、学会の取り組むべき、研究的事業であると考えている。現在の出版事情のなかでは、きわめて困難な仕事であるし、執筆態勢の面からみても、けつして容易な仕事ではないが、白田前会長の提案で計画されている事業を、十周年を期に、ぜひ実現したいものと考えている。

出版物に関して、学会の取り組むべきもう一つの課題は、全国的に、刊行された口承文芸資料と研究を、学会として、資料室に保管し、活用することである。現状では資料の蒐集は各研究者の努力にまかされている。それはもちろん意義のあることであるが、全国学会として、全国的に資料を蒐集しておくことが、将来へ向けて重要と思われる。それには、学会として購入するのがもっともよい方法だが、学会の経済的規模を考えれば、なるべく、会員、非会員から寄贈されることが望ましい。そのような慣習が確立されることを希望している。

学会が独自の事務室をもっていない現在、その保管の問題があるが、当面、いろいろな工夫によつて、保管し、かつ会員の利用に供することは不可能ではないと思うのである。

さて、以上、学会運営上の問題を、十周年にあたって整理してみた。しかし、学会としては、何よりも研究の発展が重要なのであり、運営はそのためにあることは言うまでもない。

研究の成果を整理し、今後の方向をさぐることは、それ自体独自

の研究を要することで、学会全体として取り組むべき問題であろうが、ここではわずかながら私見を述べさせていただく。

口承文芸は、人間が創出してきた他の諸文化や習俗、信仰と密接な関係をもっているので、多方面からのアプローチが必要だし、なされてきた。その上、必ず個人がかかわってきたので、伝承者の問題も重要である。

日本における口承文芸の研究は、柳田、折口の主導する方向で進んできたが、信仰との関係にせよ、説話文学との関係にせよ、その他、民俗事象、家族、村の生活などとの関係にせよ、伝承者についてにせよ、年毎に精密な研究が生れつつある。口承文芸学として認知されるためには、いっそう精緻な、客観的な研究が要求されるだろう。

歌謡研究においても、テキストだけの調査・研究に留らず、若い研究者たちによって、その音楽的性質の解明もおこなわれるようになってきた。喜ぶべき傾向というべきである。

昔話研究においては、従来の民俗学的研究や説話文学との関連からみた研究から、具体的な語り手研究に進んでいる。欧米の研究者が昔話生物学とよんでいる、昔話の生態学的研究に近づきつつあるわけである。しかし、昔話生物学とよばれている方法論に比し、各話型の話型研究という基本的な問題については、今後成すべきことを多く残している。

欧米の研究者による今世紀の成果である構造論、および様式論については、一応の紹介はなされたものの、その方法論による日本昔話の分析は未だ手つかずの状態である。

近年、口承文芸の比較研究ということばが、しばしば聞かれるようになった。それは本来、歓迎すべきことではあるが、類似の話型やモチーフを外国の資料のなかにみつけるだけでは、比較研究のための基礎作業に過ぎないのであって、上述のようなさまざまな観点からの比較がなされなければならないだろう。そのうえ、言語のちがいや、民俗的背景のちがいを考慮に入れれば、口承文芸の比較研究とは、本格的に、永年おこなわれなければ実現できないような、大事業であると思う。しかも、それはなされなければならないのである。

口承文芸は、第二次大戦後における、社会の激変にともなって、従来の方法での伝承という観点からすれば、今や急速におとろえつつある。民謡は、その歌唱性によって、今でも日常生活のなかになりに生きていけると言えるが、昔話については、今や死にかけていると言わざるをえない。しかし、目を転ずれば、それは絵本や読みものとしてもはやされている。そして、都会には昔話を改めて語ろうという人たちがたくさんいる。ひとは、昔話を捨てることはできないのである。

マスメディアの発達した現代社会の中で、口承の文芸がいかに死にたえようとしているかの正確な把握と、いかに生きのびようとしているかの正確な把握が必要であろう。例えば、最先端技術を駆使するコンピュータゲームの中にも、昔話と同じ構造的機能をみるることができるのである。現代における口承文芸の可能性も、その本質に立ち返って考究する必要があるだろう。現代民俗学が可能であるのと同じように、現代口承文芸学も可能であろうし、必要であろう。た

だし、時流に乗った論議ではなく、口承文芸の本質から出発した研究が。

それにしても、人々が、親や祖父母などから聞いて、心のなかに大切にしまっておいたものを聞かせてもらうことを、「採集」と表現することは、やめたいものである。石や虫を集めることは全く意味がらうのである。人々の血液なら採集もいいだろう。しかし、心のなかのものを聞きだすとき、採集とは言えないはずである。

それと同じように、「昔話の管理者」というのも奇妙な表現である。語り手は、幼い時代以来の大切な思い出として話なり歌なりをおぼえているのであって、管理しているのではないだろう。

口承文芸学は庶民が口で伝えてきた文芸を研究する学問である。そうであるならば、まず、それを尊重する気構えが基本になるべきであらう。

(おざわ・としお／筑波大学)